

気をつけるべき小児の腫瘍 ～悪性腫瘍を見逃さない～

編集担当 馬場 直子

小児の皮膚に腫瘍性病変をみたとき、保護者やわれわれがもっとも恐れるのは悪性腫瘍か否か、あるいは他臓器や血液の癌の皮膚転移ではないかという点である。小児の皮膚に生じる悪性腫瘍の頻度は少ないが絶対に見落としとしてはならず、ありふれた良性腫瘍をみているときも常に心にとどめておかなければならない。

筆者もこれまでに皮膚の結節性病変から白血病や悪性リンパ腫の診断に至った例を複数経験しており、早期診断につながった例もあれば、当科へ受診する前に他科で誤診されていたために貴重な時間を費やし、診断・治療が遅れてしまった残念な例もみてきた。やはり皮膚病変は早期から皮膚科医の目でしっかりみることの重要性を実感している。そういった経験からこの企画を提案したので、まず「Focus」では皮膚症状が診断契機となった乳児白血病の4例を供覧した。

乳児の皮膚腫瘍でもっとも頻度が高い乳児血管腫であるが、その疫学は意外と知られていない。「統計」ではエコチル調査から解析された日本人の有病率や、発症と有意に関連する因子は女兒、低在胎週数、生殖補助医療の実施、母親の花粉症であったという新規知見が得られた。乳児血管腫の治療は近年、早期からの色素レーザー治療やプロプラノロール内服治療により、後に残る瘢痕や機能障害を最小限に抑えることが可能となっているが、その治療選択の基準は施設によって異なっている。「治療」では、経験の多い施設の治療選択基準が明確に示されているので非常に参考になる。

「臨床例」では血管腫の症例として、皮膚だけでなく肝臓はじめ内臓にも多発するため全身検索が必要なびまん性新生児血管腫症と、比較的珍しい頭部に生じた血管性過誤腫などをあげてみた。見逃してはならない重要疾患にランゲルハンス細胞組織球症、Spitz母斑、リンパ腫様丘疹症などがあるが、それぞれの鑑別診断が詳細に記載してあり非常に参考になる。巨大な皮下腫瘍をきたすものとして粉瘤と隆起性皮膚線維肉腫をあげてみたが、切除するにも小児では長期予後や機能面を十分考慮しなければならないことが実感される。小児では過誤腫とつく腫瘍や母斑が多いのも特徴であるが、その代表例として毛包過誤腫と血管過誤腫についても書いていただいた。また脂腺母斑から二次性腫瘍が発症するのは成人以降と思われがちであるが10歳代でもありうるということがわかった例もあり、認識を改めるべきと考えた。

とにかく小児患者の場合は鎮静のむずかしさと傷跡の整容面での懸念から生検を躊躇しがちであるが、少しでも悪性を疑う場合は早期に積極的に皮膚生検することの重要性を実感する次第である。